

つながろう！世界とみやざき

中村 洋子

川崎市立宮崎小学校

◆実践教科：総合的な学習の時間 ◆時間数：9時間 ◆対象学年：4学年 ◆対象人数：35名

○実践の目的

自分とは異なる文化を持つ人々に関心を持ち、心がつながる体験を通して人とのコミュニケーションを積極的に楽しめる子どもになって欲しいと願いこの実践を試みた。

○授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	<p>「ミッション1 どこでもドアでこんなところに！出会った人にインタビューしてみよう」</p> <p>ケニア、マリの人々の写真から人々の生活を読み取り、アフリカへの関心を持つ。</p>	<p>(1) 1グループ3～4人で、写真を見ながら人々の生活について想像し、ワークシートに記入する。</p> <p>(2) グループごとに写真とワークシートに書いたことを発表する。</p> <p>(3) マリとケニアがどこにあるのか確認し、アフリカに属することを知る。</p> <p>(4) アフリカについてのイメージを話し合う。</p>	<p>(1) JICAフォトランゲージキットの中からアフリカ（マリ、ケニア）の異なる写真をグループ数分</p> <p>(2) グループごとのワークシート</p> <p>(3) 世界地図、地球儀</p> <p>(4) 実物投影機</p>
2	<p>「ミッション2 タンザニアの子どもたちに、日本の子どもたちの1日を伝えよう」</p> <p>異なる言語を持ち、遠い国にいる相手に、自分の伝えたいことを工夫して伝えようとする。</p>	<p>(1) 教師が訪れるタンザニアの位置を確認し、タンザニアについての概要を知る。</p> <p>(2) タンザニアの小学生に自分の1日の生活を知らせるために、絵などを用いてカードにかく。</p>	<p>(1) 世界地図、地球儀</p> <p>(2) 画用紙1人1枚、色鉛筆、フェルトペン</p>
3	<p>「ミッション3 タンザニアの人々の生活を知ろう」</p> <p>教師の体験や写真から、タンザニアの国や人々の様子を知る。</p>	<p>(1) 作ったカードがタンザニアの子どもたちの手に渡ったことを写真で確認する。</p> <p>(2) 教師の話や写真を通して、タンザニアの国や人々の様子について知る。</p> <p>(3) ワークシートに感想を書いて発表し合う。</p>	<p>(1) タンザニアの写真の パワーポイント</p> <p>(2) パソコン</p> <p>(3) ワークシート</p> <p>(4) カンガ、ティンガテン ンガの絵</p>
4	<p>「ミッション4 他の国のことも調べてみよう」</p> <p>タンザニア以外の国々についても調べる活動を通して関心をもつ。</p>	<p>(1) 7ヶ国8名の外国人が来校することを知る。</p> <p>(2) ケニア、ネパール、パキスタン、トルコ、ウズベキスタン、ザンビア、ツバルの中から2カ国選んで、国の概要につ</p>	<p>(1) コンピュータールームのパソコン</p> <p>(2) 図書室の本</p> <p>(3) ワークシート</p>

		いて調べる。	
5	「ミッション5 世界の人への自己紹介を考えよう」 様々な言語をもつ人々に、自己紹介をする方法を考える。	(1)これまで習った英語を使って自己紹介文を考える。 (2)外国の人に渡す名刺を作る。(ローマ字、似顔絵、マーク) (3)自己紹介して名刺を渡す練習を友だちとする。	(1)ワークシート (2)名刺の紙(1人10枚)
6	「ミッション6 世界の人のお話を聞いてみよう」 いろいろな国のお話を聞き、その国や人に関心をもつ。	(1)来校した外国人のお話を聞き、様々な文化や自然があることを知る。(6クラス合同、体育館)	(1)JICA横浜「研修員の学校訪問」8名7カ国の外国人ゲスト (2)パソコン、プロジェクター、スクリーン、ホワイトボード、世界地図掛図、マイク (3)ワークシート
7	「ミッション7 世界の人と仲良くなろう」 英語で自己紹介をして通じた喜びを感じながら、いろいろな人とコミュニケーションをとろうとする意欲をもつ。	(1)外国人一人一人に英語で自己紹介をしながら名刺を渡す。 (2)サインをもらってビンゴを楽しむ。 (3)感想交流をする。	(1)JICA横浜「研修員の学校訪問」8名7カ国の外国人ゲスト (2)作った名刺、ビンゴ用紙
8	「活動を振り返ろう」 活動全体を振り返り、活動の目的は何だったのかを考える。	(1)活動全体を振り返り、作文を書く。	(1)ワークシート
9	「感想交流をしよう」 友だちの考えを聞き、さらに自分の考えを深める。	(1)グループで感想を読み合う。 (2)グループから一人、全体の前で感想を発表する。	(1)ワークシート

○授業の詳細

【1時間目】

開発教育の研修で受けた「おじいちゃんの世界旅行」の授業提案をアレンジして行った。JICA のフォトランゲージキットの中からアフリカのものだけを選び、各班に1枚ずつ渡した。写真がどこの国であるかななどの情報は一切与えず、写真に写る人々の生活や気持ちを先入観なく考えさせたかった。ワークシートに書かれている内容は、「どのようなことをして暮らしていますか?」「楽しみは何ですか?」「悩みは何ですか?」「大切にしているものは何ですか?」「夢は何ですか?」「お土産に何をもらいましたか?」などである。



ケニアのコーヒー豆を採取している写真は実が赤かったため「さくらんぼかな?」「プチトマトかな?」と写真を見ながら話し合っていた。最後にコーヒー豆だと言うことを明かすとたいへん驚いていた。マリの学校給食の写真は、豆の煮込んだもの一品が皿に盛られているだけで、日本の給食メニューとは大違いであるこ

とに気づく。そのことから「かわいそう」という感想を持った子もいたが、中には「ぼくは豆が好きだからうらやましい」という感想もあった。最後に各グループに配った写真がケニアとマリというアフリカの国々なのだという



うことを伝え、アフリカに対するイメージを話し合った。「貧しい」というような内容の答えが圧倒的に多かった。「電気がない」「食べるものがない」などもあがった。

今回の授業では貧しさではなく多様性を強調したかったが、子どもたちの中にあつた何らかの知識が先行したのか、教師のコメントの節々に貧しさを示唆するようなニュアンスがあつたのか、アフリカに対するネガティブなイメージが多く出された。子どもたちの好きな動物の写真や華やかな民族衣装の写真を用意するなど、工夫の余地はありそうだ。

【2時間目】

「先生は、アフリカにあるタンザニアという国の小学校に行ってくるんだよ。」という、半信半疑の子どもたち。「タンザニアの小学生に、日本の小学生がどんな1日を過ごしているかを伝えたいのだけれどどうすればいいかな？」という発問をし、日本語は通じない、スワヒリ語を使う、英語は少しわかる。アルファベットは読める、数字は日本と同じ、時差はあるが時刻は日本と同じ(現地に行ってみるとスワヒリタイムをつかっていることがわかった。午前7時を朝1時という。午後7時を夜1時という。)などの条件を伝えた。その結果、一人一人画用紙に自分の朝起きるところから夜寝るまでの1日の生活を、時刻を入れて絵に表すことにまとまった。

子どもたちは色鉛筆を使い、カラフルで楽しい絵カードを作っていた。Helloにあたる言葉がスワヒリ語で Jambo であることを伝え、画用紙の中央や目立つ所に Jambo!と大きく書き表す子もいた。朝の場面では Ohayo!などと書き、日本語の挨拶をローマ字で紹介しようとした子もいた。また、折り紙は日本だけの伝統遊びであることを伝え、折り紙の作品をたくさん作ってタンザニアの子どもたちにプレゼントすることにした。馴染みはあっても4年生ともなるとあまり夢中になることはない折り紙だが、「日本の伝承遊びを伝える」ということを意識したことから、真剣に取り組んでいた。



【3時間目】

夏休み明けの9月になる。教師がタンザニアから帰って来てからの授業になる。「先生、本当にタンザニアに行ったんだね。」という声もあった。パワーポイントを使いタンザニアの写真を使いながら、タンザニアの様子を紹介した。また、子どもたちの作った絵カードや折り紙の作品をタンザニアの小学生が嬉しそうに手にしている写真を何枚か見せた。「あ！ぼくが





描いたカードだ！」「作った折り紙、喜んでるね！」と、興奮気味に話していた。

この授業の終わりに感想をワークシートに記入した。想定内のもの、想定外のもの、様々な感想が見られた。「子どもが川から家まで水を運ぶのがすごい。」「子どもたちが働いていることはいいことだ。」「貧乏だけど、子どもたちは楽しい生活をしていてすごい。」など、子どもに目を向けた感想が多くあった。「豆を使った料理が多いのでぼくも食べてみたい。」「給食でいっぱい豆が出るのはいいな。」「硬貨には動物の

絵がかいてある。」「動物がいっぱいいる。」「タンザニアで動物にあいたい。」など、食べ物や動物など子どもの興味のあるものに目を向けた感想も見られた。タンザニアでは携帯電話が流行していたことや、マサイ族の人たちは民族衣装を着ているけれども、携帯電話で電話をしていることを話すと、「貧しい国だと思ったら、意外とハイテク。」という教師自身の驚きが反映されている様子がうかがえた。「明るいけど、貧しいということがわかった。」「貧しいから物を売ったり水を節約したりしているんだな。」「貧乏でかわいそう。」という感想もあった。気を付けて写真や言葉を選んだつもりなのに「貧しさ」を印象付けさせてしまったような気がしてタンザニアの方々に申し訳なさを感じた。「日本と違って協力して水を汲んでいる。」「日本は豊か。タンザニアはたいへん。」「タンザニアは日本と違って不便。」「日本の方が進んでいるな。」「日本の車があってびっくり。」など、日本との比較や関わりに目を向けたものも見られた。



【4時間目】

JICA横浜の「研修員の学校訪問プログラム」というのを知り、利用させてもらった。日本に職業研修に来ている何人かの外国人が学校に来てくれて授業にかかわってくれるプログラムである。タンザニアについて知ったことから、他の国についても調べてみようという活動につなげていった。来校予定の外国人がどこの国の人たちなのか予めわかっていたので、それら7ヶ国から2ヶ国を選択させ、パソコンや図鑑などから概要を調べていった。もうすぐ自分が調べている国の人に会えるのだという目的意識をもった活動だったので、たいへん意欲的に取り組んでいた。その国の挨拶の言葉を覚えて、会った時に使ってみようと準備している子もいた。

【5時間目】

「せっかく世界の人々に会えるのだから、コミュニケーションをとって仲良くなろうよ。」と投げかけると、「コミュニケーション？」「どうやって？」「言葉が通じないよ。」と、子どもたちは困惑した様子だった。前時で国に

よって言語が異なることは調べ済みである。「それぞれ使う言葉が違う時は、どうしたらいい？」と聞くと、「英語？ジェスチャー？」「そうだよ！英語は世界共通語なんだよね。」「大人なら英語は話せるかもしれない。」「ジェスチャーも使えば通じるかもしれない！」という流れから、英語で自己紹介をすることになった。これまでに習った英語の挨拶、名前の紹介、相手の名前の聞き方、自分の好きなものや好きなことの言い方を、友だちと相談したり教師に聞いたりしながら、ワークシートにおこしていった。発音や文法が少々違ってても伝わればいい、習ってきた簡単な英語だけでもコミュニケーションがとれるのだというスタンスで、子どもたちを助けていった。自己紹介をする際に渡す名刺も手作りで作成した。ローマ字で自分の名前を書き、自分の似顔絵やマーク、好きな物や好きなことの絵なども描き加えたオリジナリティー溢れる素敵な名刺になった。

【6時間目】

学年6クラス全体で体育館に集まり、7ヶ国8名の外国の方々の話を聞いた。英語でのお話だったのでJICAのスタッフがところどころ通訳してくださった。子どもには難しいところもあったが、大スクリーンに写真を映し出した説明だったので、興味深く話を聞くことができたようである。自分が調べた国については、知っている情報もあり、「あっ、それ、パソコンでも出てきたよ。」などと嬉しそうだった。



【7時間目】

いよいよ外国の人に自己紹介をする時がきた。8人もの外国人とマンツーマンでかかわれる貴重な体験である。名刺を渡して自己紹介ができれば、「サイン、プリーズ！」と言ってサインをもらうことにした。ビンゴの枠を用意し、1マスに1人ずつサインを書いてもらう。サインだけでなく、国名や自己紹介で伝えた児童の名前、一言メッセージなどを書いてくれていた。子どもたちにとっては解読不能であったが、そこがむしろ外国人が書いたという実感があり、嬉しかったようである。「はじめはドキドキしたけど、すぐに慣れた。」という感想が多くあった。初めは緊張で固まっていた子どもたちだったが、1人目が終わると緊張がほぐれて表情も明るくなった。「失敗しても、相手と自分で笑い飛ばせるようになった。」という感想もあった。「外国の人はみんなやさしかった。」「トルコとザンビアの人となかよくなった気がした。」などの声が聞かれ、外国の方々が子どもたちの話にしっかり耳を向け、やさしい表情や受け応えで接してくれたことで、子どもたちはリラックスできたようである。「バレーボールが好きという人がいて、ぼくと同じでびっくりした。」「アップルが好きという人に、りんごの絵をかいた名刺をあげると喜んでいて。」という感想からは、自己紹介から会話が発展していった様子が伺える。



【8, 9時間目】

「つながろう！世界とみやざき」の全活動を通して、振り返りの作文を書いた。子どもたちがたいへん貴重な体験をもてたのだということが作文から伝わり、たいへん嬉しく感じた。

子どもたちの感想

- ・ 名刺を渡すとき、知らない人だし外国の人だったけれど、話していると友だちのように感じました。
- ・ 外国の人たちと交流をして、コミュニケーションをとることは誰にだってできることだということがわかりました。

- ・ 言葉は通じないけど心がつながっていて、なぜだか仲良しになった気分でした。
- ・ もっともっと英語の勉強をして、たくさんの人々と仲良しになって、世界全部の国の人たちと友だちになりたいです。
- ・ 外国に行ったこともないし、外国の人と会ったこともないのに、90分いっしょにいただけで友だちのようになって、顔がガチガチだったのに、相手も自分も笑顔になりました。
- ・ 外国の人を見たときこわい人なのかなと思ったけど、実際はとてもやさしくおだやかだったのでホッとしました。
- ・ 外国の人と、自分の考えや自分の言葉で話してふれあうことは、大きくなって役に立つかもしれないと思いました。
- ・ ザンビアの人がやさしくて話しやすかったです。なぜかという、ぼくもザンビアの人もサッカーが好きでわからない英語があまりなかったからです。
- ・ ケニアの人は、見たときちょっとこわかったけど、しゃべってみたらけっこう楽しかったです。
- ・ はじめは何を言っているかわからなかったけど、何人か自己紹介しているうちにふつうに話せるようになりました。こうやって、いろいろな国の人たちといっしょにいると英語がうまくなれるような気がしました。



○成果と課題

成果

本単元では、5年生から本格的に始まる外国語活動への動機づけとしたいというねらいもあった。1～4年生までは年間10時間の英語活動を行っている。その中で繰り返し挨拶や自己紹介をALTや友だちと一緒にやってきた。今回は日本語がほとんど話せない外国人が8名も学校に来たことから、英語を使わなければならないという必要感が生まれ、子どもたちは必死になった。これまで習った英語をカタカナで並べ立てて自己紹介文を作った。自分を紹介するために「I like ～.」なども活用できた。相手に尋ねるために「How about you?」なども試みた。言うことが決まるとすらすらと言えるように家でも練習してきた子が多くいた。家の人たちも本当に外国人が来るのであればと、子どもたちに他のフレーズを教えるなどし、一家総出で取り組んだ家庭もあった。ここまで準備してもやはり肌の色も言語も違う外国人を目の当たりにすると緊張が走り、体が固まってしまう。教師や友だちが横で助けながら、たどたどしく自己紹介を進めていた。「自分が考えてきたことを言うだけならできるけど、相手が途中で何か言ったりするとわからなくなってしまう。」と、多くの子が口にしていた。これがコミュニケーションの醍醐味であり難しさなのだと思う。子どもたちは体験を通してそれを実感したのである。英語が通じた喜びを感じられるようにと教師は意図していたが、「一生懸命に聞いてくれた。」「にっこり笑ってくれた。」「ぼくと同じサッカーが好きだって。」「サインがたくさん集まった。」「全員に自己紹介できた。」と、英語に囚われず、コミュニケーションそのものに喜びや楽しさを感じられたようである。教師の意図を超え、実体験からかけがいのないものを学んだのである。

課題

タンザニアの共同水道のバケツの水をクローズアップした写真からは、「濁っている」「汚い」「飲めない」「病気にならない?」「こんなところには暮らせない」というようなネガティブな声が多く聞かれた。4年生は、社会科で浄水場見学をしたばかりで、きれいな水のありがたさを学習したばかりである。事



実を伝えるのは大事なことだが、国のイメージや人々への偏見にかかわることなので、水の濁りまでが表されている写真を使う必要はなかったのではと感じている。水以外にも貧しさを印象付けさせてしまう場面があり、教師の意図するところから外れ、「貧しい」「不便」という感想が多く見受けられた。国を紹介する時には伝え方によりその国の印象を大きく左右してしまう危険性を感じた。使用する写真、コメントなどには、細心の注意を払いたい。



タンザニアを訪れて最も驚いたことはトイレであった。過剰な程にトイレに気を使う日本との大きな違いを感じたからである。どちらが前でどちらが後ろかわからない簡易な形の便器。水を流すボタンやレバーは見当たらず、水の入ったバケツに柄杓が浮かんでいて、それを使って水を流すシステム。多数の使用者の排泄物は簡単に目に入り、紙を使う習慣などないことも見受けられる。何百人もの子どもたちが通う小学校でもトイレは2つだけ。トイレがなくてもそれほど不便はない生活なのか、トイレではないところで用を済ませているのか、不思議でならない。穴を掘っただけのようなトイレもたくさんあった。穴が排泄物でいっぱいになれば、近くの別の場所に穴を掘ってトイレを移動

させるらしい。農村を訪れた時に、「うちのトイレが一番きれいだ。」という家からトイレをお借りした。家の構えは他の家より大きく立派なものであったが、トイレには壁はあるがドアがない。地面に穴が掘られていて足場に木の板が置かれて、お世辞にもきれいとは言えない。ドアが閉まらないトイレ、鍵が壊れているトイレなども多数使用し、誰かドアを開けるのではないかと冷や冷やししながら用を済ます経験をした。このようなトイレ事情には、初めは困惑したが慣れるものである。日本に帰ってからは、便座の蓋が自動で開くことや、便座が温かくなっていること、さらには音消し用の「音姫」までが備わっていることに、ここまで必要なのだろうかと疑問を感じた。本来ならば、このギャップ、カルチャーショックをもとに「違いを楽しもう」という視点で授業を行ってみたかった。また、「意外と慣れる」ということについても子どもたちに伝えたかった。しかし前に述べたように、これは子どもたちに「汚い」「遅れている」というような印象を与える危険性をはらんでいる。「違いを楽しむ」という教師の意図から外れた思考展開を招く恐れがあるため、今回はたくさん撮ってきた多種多様なトイレの写真を授業で扱うことを避けた。



○参考資料

「おじいちゃんの世界旅行」K-DEC(神奈川県開発教育協会)

授業提案

「JICAフォトランゲージキット」JICA

「研修員の学校訪問」JICA